

1. 略歴

1992年3月	東京大学文学部心理学専修課程卒業
1992年4月	東京大学文学部研究生（～1993年3月）
1993年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1995年3月	同修了（修士（文学）取得）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野博士課程進学
2000年3月	同単位取得退学
2001年4月	聖心女子大学文学部専任講師
2003年4月	聖心女子大学大学院文学研究科専任講師兼任
2007年4月	聖心女子大学文学部准教授、聖心女子大学大学院文学研究科准教授兼任
2008年9月	博士（文学）取得（東京大学大学院人文社会系研究科）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2020年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ研究

b 研究課題

日本人の死生観、宗教理論、個人主義的スピリチュアリティ、サステナビリティと人文知

c 概要と自己評価

研究と教育の方向性は大きく二つに分けられる。一つは死生学・宗教学方面で、もう一つはサステナビリティ学方面である。この二つは、死生学・応用倫理センターの、「死生学」と「応用倫理」に対応する。

死生学方面では、コロナ禍を踏まえて、2021年に日韓加3カ国同時のコロナ死生観調査をおこなった。これは、2019年の死生観調査をベースとしつつも、コロナ禍で問題となっている主要な争点を全てデータで検証しようという試みで、将来的に貴重な記録を残すものとなった。その内容は多岐にわたるが、もっとも喫緊の論点と思われる、コロナ患者のトリアージをめぐる問題については、同僚の小松美彦とともに編集した『(反延命) 主義の時代』において、データに基づいて、一般国民は年齢によるトリアージに反対していることを明らかにした。

他方、こうした社会的要請の度合いの高い問題とは別に、東日本大震災から10年という節目の年を迎え2021年には、被災地でおこなった霊的体験に関する調査を、東北大学の髙橋原教授との共著『死者の力』にまとめた。それにちなんだ論文、メディア記事、また対談にも積極的に取り組んだ。

加えて、ポッドキャストを配信し、コロナ禍で閉じこもっている人々に、より広い見地から現在の状況を捉えるためのヒントとして、死生学、宗教学、スピリチュアリティ研究、サステナビリティ学の知見を伝えるよう努力した。また、この2年間は、学会および一般向けの招待講演をおこなう機会に多く恵まれた。結果として、コロナ禍においてかえって広く社会的発信に注力することになった。

サステナビリティ学方面では、本研究科の教員が中心となって推進してきた総長裁量経費による「Sustainability と人文知」プロジェクトの実施責任者として、研究交流を促進してきた。このプロジェクトは2020年度で終了したが、それに伴い、2015年度から2020年度までの活動実績の報告書を編纂した。2021年度は、文学部の事業としてプロジェクトを継続し、学内公開研究会を多分野交流演習としても院生に開き、学外からも多数の講師を招いて、研究活動の範囲を広げている。現在、東京大学はSDGs（持続可能な開発目標）達成に研究面から積極的に関与しており、GX（グリーン・トランスフォーメーション）を行動計画の柱の一つとしている。だが、サステナビリティやSDGsやGXへの学生・院生の関心は必ずしも高くない。とくに、本学部・本研究科の学生・院生の環境への関心が低いことが問題として見えている。コロナ禍という困難な状況ではあるが、学生の関心を高めるためにどのような方策が有効なのかを本学全体にも関わる教育課題として模索していきたい。いずれにせよ、この2年間でサステナビリティを人文社会系研究科の教員として研究と教育の両輪で進めるという道筋ははっきりとし、関係する教員の間で共有されたことが、今後につながる大きな成果と言える。

今後は、コロナ死生観調査の続編を、2019年の基本的な死生観調査と総合する形で実施してゆきたい。死生観に関する基礎的なデータを提供することは、当センター・専攻の社会的責務であり、この事業を着実に実行していきたい。

とくにコロナ禍の死生観、生命倫理への影響を調査し、後世に残す責務があると言える。同時に既に終了している調査の成果を著書の形でまとめて世に問いたい。また、サステナビリティ学方面では、多分野交流演習という形でサステナビリティと人文知に関心を持つ教員間の交流を続行すると同時に、海外の「サステナブルな人文学」の動きとも連携し、学問的な体系化の方向を模索したい。理論面では従来からの未来倫理に関する探究をすすめ、感染症のみならず様々な想定外の危機に対応するリスク社会のエトスを明確化したい。

d 主要業績

(1) 著書

小松美彦・市野川容孝・堀江宗正（編著）、『〈反延命〉主義の時代——安楽死・透析中止・トリアージ』（現代書館、2021.7）、「序章」12-46頁、「第5章」（聞き手）186-200頁（298頁中、50頁担当）
高橋原・堀江宗正（共著）、『死者の力——津波被災地「霊的体験」の死生学』（岩波書店、2021.9）、「第3章」「第4章」「第5章」「結論」「あとがきに代えて」67-277頁（277頁中、211頁を執筆）
（実施責任者として編集・執筆した報告書）『東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」（2015年度～2020年度）報告書』（2021.3）

(2) 翻訳

トニー・ウォルター、『いま死の意味とは』（岩波書店、2020.4）、全192頁

(3) 論文

堀江宗正、「死を前にして生きる——良い死はあるか」、浅草寺『佛教文化講座』第64集（2020.8）、122-141頁
堀江宗正、「東日本大震災における霊的体験——故人との継続する絆と共同体の力」、『臨床心理学』増刊第12号（特集 治療は文化である）（2020.8）、118-124頁
堀江宗正、「『日本の霊性』をひらく——スピリチュアリティ関連思想との類似性から」、『現代思想総特集 鈴木大拙』11月臨時増刊号（2020.10）、204-219頁
堀江宗正、「スピリチュアリティと生の意味——宗教と心理学の観点から」、『死生学・応用倫理研究』26号（2021.3）、27-50頁
堀江宗正、「専門知と政治の間で——多分野交流演習「サステナビリティと人文知」2020年度を終えて」、『東京大学総長裁量経費プロジェクト「Sustainability と人文知」（2015年度～2020年度）報告書』（2021.3）、211-215頁
堀江宗正、「メディア史のなかのスピリチュアリティ」、『福音と世界』（特集 スピリチュアリティ——社会との交渉）2021年5月号（2021.4）、18-23頁
Norichika Horie, “Spirituality,” Erica Baffelli, Andrea Castiglioni, and Fabio Rambelli (eds.), *The Bloomsbury Handbook of Japanese Religions* (London: Bloomsbury, April 2021), pp. 241-249
堀江宗正、「サステナブル人文学を目指して——専門知の公共性を高めるアジールとして」、『多分野交流演習ニューズレター』第81号（2021.7）、頁番号なし（全5頁）
堀江宗正、「〈反延命〉主義とは何か」、小松美彦・市野川容孝・堀江宗正編著『〈反延命〉主義の時代——安楽死・透析中止・トリアージ』（現代書館、2021.7）、12-46頁
堀江宗正、「消費社会と宗教の変容——聖なるものへの奉獻から自己への奉獻／投資へ」、島藺進・末木文美士・大谷栄一・西村明『近代日本宗教史第6巻 模索する現代——昭和後期～平成期』（春秋社、2021.7）、111-143頁
堀江宗正、「コロナ禍がはらむ命の選別と連帯の可能性」、福永真弓編『Tokyo College Booklet Series11 連続シンポジウム「コロナ危機後の社会——長期的な視点から見た『新常态』とは？③脆さ・弱さと共にある連帯の社会システムへ』』（東京大学国際高等研究所東京カレッジ、2021.8）、7-15頁
堀江宗正、「宗教と感染爆発——通過儀礼としてのパンデミック」、『宗教研究』（特集 宗教と疫病）（2021.9）、第95巻2輯、371-394頁
堀江宗正、「「亡くなった人はここにいる」…震災被災地の「霊的体験」が私たちに教えてくれること——「多死社会」へのヒント」、『現代ビジネス』（2021.10.17）、<<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/88344>>
堀江宗正（寄与者：パク・ジュンシク、和田香織）、「202203 新型コロナウイルス感染症に関する死生観調査（コロナ死生観調査）の結果について」、『死生学・応用倫理研究』27号（2022.3）、(1)268-(45)222頁
Norichika Horie (With Joon-Shik Park and Kaori Wada), “Results of Survey on Views of Life and Death Related to COVID-19 (SoVoLaD-COVID-19),” *Journal of Death and Life Studies and Practical Ethics* 27 (March 2022), pp. (46)221-(94)173

(4) 小論・記事

堀江宗正、「現代社会に広がるスピリチュアリティ」、『読売クオーターリー』（2020春号、2020.4）、134-143頁
堀江宗正、「宗教が感染爆発の引き金に——集会なき礼拝支えられるか」、『中外日報』（2020.4.10）、8頁
堀江宗正、「コロナ禍に生きる——命のつながりを感じて」、『山陰中央新報』（2020.4.22）、24頁

堀江宗正、「ポスト・コロナの地球意識——消費抑制は温暖化阻めるか」、『中外日報』(2020.5.29)、8頁
堀江宗正、「早すぎるトリアージを許すな——人間性の放棄につながる懸念」、『中外日報』(2020.10.8)、8頁
堀江宗正、「新たな精神的感染症——「トランプ支持者」の陰謀論」、『中外日報』(2020.9.25)、8頁
堀江宗正、「大統領選でQアノン台頭——米福音派にも近く日本も注意を」、『中外日報』(2020.11.13)、8頁
堀江宗正、「新型コロナと2021年——科学と社会の架け橋に」、『週刊 東京大学新聞』(2021.1.1)、3頁
堀江宗正、「教団の関与目立つトランプ現象——「隠される宗教」に注視必要」、『中外日報』(2021.1.29)、8頁
堀江宗正、「米国で広がるアジア憎悪——「他人事感覚」超えるべき問題」、『中外日報』(2021.3.26)、8頁
小松美彦・市野川容孝・堀江宗正、「〈反延命〉主義の時代に対抗する思想と実践のために」、『週刊読書人』(2021.8.27)、
1-2頁
堀江宗正、「「死者の力」とパンデミック」、『東京大学 統合報告書2021 IR Cubed』(2021.11.26)、75頁

(5) 対談・ポッドキャスト

鏡リュウジ・堀江宗正、「ユングと現代のスピリチュアリティ」(朝日カルチャーセンター新宿教室、オンライン、
2020.7.6)、招待講演
堀江宗正、「ノアエイジ NOrAGE 予告編」(ノアエイジ NOrAGE、2021.1.3)
堀江宗正、「テーマは2021」(ノアエイジ NOrAGE、2021.1.16)
森岡正博・堀江宗正、「トランプ支持現象とスピリチュアリティ」、森岡正博Instagram(Instagramライブ、
2021.1.24)、招待講演
堀江宗正、「オンライン化と仕事の価値」(ノアエイジ NOrAGE、2021.1.30)
堀江宗正、「感情の力について」(ノアエイジ NOrAGE、2021.2.15)
堀江宗正、「『鬼滅の刃』について」(ノアエイジ NOrAGE、2021.3.1)
堀江宗正・高橋原、「死者の力——震災の経験から」、ジュンク堂書店・池袋本店(オンライン、2021.3.2)、招待講演
堀江宗正、「90年代」(ノアエイジ NOrAGE、2021.3.14)
堀江宗正、「都市と田舎」(ノアエイジ NOrAGE、2021.3.30)
堀江宗正、「コロナと私たちの文化環境」(ノアエイジ NOrAGE、2021.4.10)
堀江宗正、「食について」(ノアエイジ NOrAGE、2021.4.25)
堀江宗正、「うつとスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.5.25)
堀江宗正、「ビジネスとスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.6.15)
堀江宗正、「ファッションとスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.6.28)
堀江宗正、「音楽とライフスタイル」(ノアエイジ NOrAGE、2021.7.11)
堀江宗正、「宮崎アニメとスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.7.28)
堀江宗正、「お盆について」(ノアエイジ NOrAGE、2021.8.7)
堀江宗正、「妖怪と謎」(ノアエイジ NOrAGE、2021.8.21)
堀江宗正、「動物とスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.9.5)
堀江宗正、「死者の力」(ノアエイジ NOrAGE、2021.9.20)
堀江宗正、「土地の見えない働き」(ノアエイジ NOrAGE、2021.10.12)
堀江宗正、「生まれ変わりとワンネス」(ノアエイジ NOrAGE、2021.11.9)
堀江宗正、「治療と治癒」(ノアエイジ NOrAGE、2021.11.23)
堀江宗正、「政治とスピリチュアリティ」(ノアエイジ NOrAGE、2021.12.17)
堀江宗正、「2021年の10大ニュース」(ノアエイジ NOrAGE、2021.12.30)
堀江宗正、「僕の音楽遍歴」(ノアエイジ NOrAGE、2022.1.22)
堀江宗正、「推しは宗教なのか」(ノアエイジ NOrAGE、2022.2.18)

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本宗教学会(理事)、「宗教と社会」学会、日本社会学会、日本生命倫理学会、日本自殺予防学会、日本スピリチュアルケア学会